

東日本大震災5年目プロジェクト —写真展を通して考えるこれまでと今とこれから—

教育・研究

国際交流

地域交流

代表者：人文科学研究科社会科学専攻2年 小野田 明

連携先

夢ふたば人
茨城県内への避難者支援・支援者ネットワーク
ふうあいねっと
NPO法人勿来まちづくりさぼーとセンター
双葉町
双葉町立学校
大洗リゾートアウトレット
コープみらい
加須市立種足小学校
ぶちとまとアートカフェ

顧問教員

原口 弥生（人文学部・教授）

参加者

小野田 明（人文科学研究科社会科学専攻2年）
箭内 淳美（人文学部社会科学科3年）
霜田 菜摘（人文学部社会科学科3年）
旭山 未来（人文学部社会科学科3年）

プロジェクトの概要

本プロジェクトは、震災や原発事故の影響によって未だ全町避難を強いられている福島県双葉町の写真展を通し、被災地の現状を伝えるとともに、私たちにとって3.11はどのような出来事だったのかを改めて考えるきっかけを提示する。本プロジェクトのきっかけにもなっている2015年5月から約2週間、茨城大学図書館展示室で開催された「双葉町モノクロ写真展」は大きな反響を呼び、今後

も各地で写真展を開催してほしいとの声を多く頂いていた。復興とともに風化が進んでいるのも現実であり、東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故は過去の出来事となりつつある。震災から丸4年が経過し、5年目を迎えた現在だからこそ、これまでを振り返り、今を見つめ直し、これからの繋げていく必要があると感じ、メンバーが中心となって写真展を継続・拡大していく体制を整えた。

写真1枚1枚にキャプションをつけ、当事者の視点から原発事故被害地域の等身大の姿を伝えるとともに、震災以降、双葉町との関わりを持ち難くなっている町民へ、「写真展」という場を作ることで、町や町民と関わるきっかけを提示することも目標とした。そして写真展を通し、写真を見てくださった方々や双葉町のこれまでと今とこれからから考えるきっかけを作ることを目的とした。

プロジェクトの成果報告

・写真展日程

2015年7月19日～7月31日

双葉町写真展「HOME TOWN」
at ぶちとまとアートカフェ（主催）

2015年8月17日～10月12日

双葉町モノクロ写真展「HOME TOWN」
大洗リゾートアウトレット（主催）

2015年10月24日～11月2日

ポレポレ東中野（写真提供）

2015年11月3日
コープみらいフェスタ（写真提供）
at 埼玉スーパーアリーナ

2015年10月30日～11月6日
MAFれん展（写真提供）
at 東京都立美術館

2016年1月9日～1月10日
双葉町写真展「HOME TOWN」（主催）
at 双葉町ダルマ市（いわき市南台仮設住宅）

・各写真展について

（双葉町モノクロ写真展
at ぶちとまとアートカフェ）

本プロジェクトの最初の写真展は、埼玉県上尾市にあるカフェ兼ギャラリー「ぶちとまとアートカフェ」で開催した写真展である。会場であるぶちとまとアートカフェさんや、地元埼玉県の方々の協力も得ながら、約2週間の写真展開催が実現した。



ぶちとまとアートカフェの様子

本写真展では、このプロジェクトのきっかけにもなっている2015年5月に茨城大学で開催された写真展で出されていた要望の一つで出ていたトークセッションが実現した。双葉町民だけでなく埼玉県、東京都、神奈川県

から多くの方々に来場していただき、写真を通して意見が飛び交った。会場は双葉町民再会の場ともなり、久しぶりに会う知人の姿に喜ぶ町民の姿も見られた。



トークセッションの様子

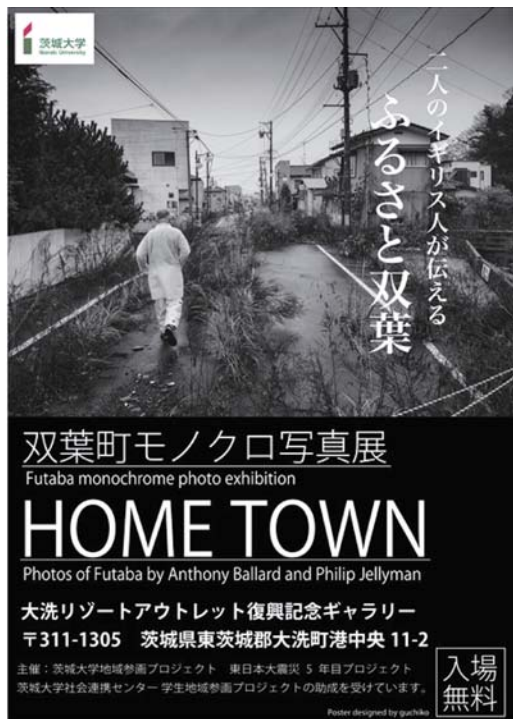


2015年7月24日付 埼玉新聞より

（双葉町モノクロ写真展「HOME TOWN」
at 大洗リゾートアウトレット）

茨城県内では、大洗リゾートアウトレット内にある復興記念ファラリーにて約2ヶ月の長期に渡って写真展を開催した。この写真展では、これまでの要望で多く出ていたカラーの写真を追加することができた。すでに写真展の問い合わせは多く来ていたが、会場の関係からこれまでは短期間での開催しかできず、写真を見たくともみれないとの声も出てきていた。そのような状況の中で、長期的に写真を展示することができたのがこの写真展である。双葉町復興員がブログで宣伝協力をしてくださり、会場に設置したノートには沢山の

感想が残されていた。また、写真それぞれにあるキャプションは日本語と英語で書かれており、海外の人にも伝えられるようにした。ノートには英語での感想も書かれていた。



写真展ポスター 大洗ver

また、この写真展では双葉町関連の資料を設置することで、何気なくギャラリーに寄った方々も理解し易いよう努め、展示しきれない写真はスライドショーの映像を作成し、会場内のモニターで流した。リゾートアウトレットという環境もあり、感想ノートにはふと立ち寄った方々の声も多く残されていた。



会場の様子

大洗リゾートアウトレットでの写真展後は、依頼が来ていた展示会へ写真を提供するという形を取り、写真展を開催した。その結果、本プロジェクトの一つの目標でもあった東京都内での写真展示も実現することができた。さいたまスーパーアリーナ、ポレポレ東中野、東京都立美術館の3回の写真展は、立地や会場の条件から多くの方に写真を観ていただく機会を作ることができ、双葉町の現状を伝えるとともに、風化が進む東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故が過去の出来事でないことを多くの人々に伝えることができた機会となった。



at さいたまスーパーアリーナ



at さいたまスーパーアリーナ



at ポレポレ東中野



at いわき南台仮設住宅 双葉町ダルマ市



at 東京都立美術館



写真を提供して下さった双葉町立学校のアンソニー・バラードさんとフィリップ・ジェリーマンさん

(双葉町ダルマ市)

そして本プロジェクト最大の目的であり、集大成でもある双葉町ダルマ市での写真展を、夢ふたば人協力のもと2016年1月9日10日に渡って開催することができた。双葉町ダルマ市は、約7000人が来場し、現在双葉町民が最も多く集まるイベントである。また、双葉町民だけでなく、地元いわき市の方々も多く来場し、写真を通して、共に知る・伝える・考える場を作ることができた。

この頃には、これまで基本としてきたモノクロ写真だけでなく、カラー写真も多くなっていた。時の進行とともにより複雑化していく状況において、写真は現実のほんの一面を映し出しているに過ぎない。しかしながら、2011年から2015年までの期間に撮影した、双葉町民がお気に入りの場所、そして町の人々が住んでいた家々、埼玉県に設置された避難所や、仮設住宅での生活風景などの写真も展示した。単なる郷愁に浸るのではなく、被災当事者自身もこれまでを振り返り、また全ての人に対して、当事者の視点から語られる写真1枚1枚を通して、3.11が未だ過去の出来事でないことを伝えてきた。写真を通して持つ感想は人それぞれであるが、感想ノートへ残された多くの書き込みから、私たちが本プロジェクトのタイトルとしても設定した、

これまでと今とこれからを考える場を作ることができたと実感している。

本プロジェクトは、写真展を開催することが目的としてスタートしており、開催イコール成果であった。しかしながら、会場でいただいた意見やノートに残された感想、また写真展開催依頼をいただくことで、一つの答えやメッセージはないものの、実施するにつれて、開催することの意義を感じる事ができた。本写真展は、考えていくべき未来の姿など、何も答えを持っていない。しかしながら、考え始める、振り返り始める、見つめ始める、その場をつくることの重要性を私たち自身が気づかされたプロジェクトであった。

●今後の課題と展望

本プロジェクトメンバーは、福島県内外の出身者で構成されている。何万枚とある写真データの中から、どの写真を印刷するか。会場によって展示枚数が制限される場合もあり、どの写真をどのような形で展示すればいいかを議論し、自分たちで会場に足を運んで展示作業や会場設営まで行ってきた。

しかし残念ながら、本プロジェクトは2016年1月末を持って終了となるが、これまで開催してきた写真展の影響もあり、2月3月開催の写真展も決定しているため、今後とも継続的に写真展を開催していく。来年度からは、事務局を双葉町出身者の若者グループに引き継ぐ形で、写真展を継続させる予定である。時間の経過とともに、3.11の問題・課題はより複雑化してきている。だからこそ、継続的に写真を撮り続け、写真展を開催していく必要がある。また、本プロジェクトは双葉町だけを対象としていたが、他市町村にも写真を記録し続けている人々がいるため、今後はこれまで培ったノウハウを引き継ぐだけでなく、さらに広いフィールドを対象とし、写真展を開催していく必要もあると感じてい

る。そして、最終的には今後双葉町に建設が予定されているアーカイブセンターへ、写真を寄贈する予定でいる。

●感想ノート(一部紹介)

写真が美しかった。我がふるさとはやはり美しい街であったことを再確認できた。悲しみの中の希望を見つけることができた。感謝。

「記憶」だけではいつか失われてしまうかもしれませんが、「今」を切り取って「記録」していくことで、それは未来を考える上で誰でも共有できる財産になります。今後ともぜひ大切な「記録」を増やしていきましょう。

正直イメージと違いました。確かに被害の様子は描かれていましたが、そこを強調するわけでもなく、具体的なエピソードやちょっとした瞬間を切り取っていて、これまで大枠でしかみてこなかった被災地や避難者を初めて知ることができた気がします。人が生きることとは、土地に生きることとは、そんなメッセージがこの写真展にあるのではないのでしょうか。

双葉町の状況は茨城にいてはなかなか入ってこないもので、今回見る事ができてよかったです。ニュースになるのは、中間貯蔵がどうか、原発の作業がどうかばかりで、なかなか人、場所に焦点を当てられることがないなと思っていました。「人」や「地域」「場所」について、今回の写真展で広まればいいなと思います。

ボランティアで何度か福島を訪れたことがありましたが、今回の写真を通して改めて震災や原発について考えなければと感じました。最近ではメディアの露出も減り、個人的にも

過去の出来事になりつつあったので、今回このような場を提供して下さったことに感謝しています。今後もしっかりと向き合っていきたいと思いました。

私も双葉町民の一人です。現実が辛すぎて、一時帰宅もせずにおりました。今回の写真展を通して、町の姿を見ることができてよかったです。震災により変わり果てた姿であっても、心に残る思い出の場所がそこにはありました。写真だからこそ見ることができたと思いますし、これから現実とどう関わっていくか、少し見えてきたような気がします。

なんでもないと思っている日常の生活がいかにありがたいものなのか、地元に戻れないということがいかに異常なことなのか、非日常が日常化している空間を目の当たりにして深く考えさせられます。

買い物ついでにたまたま寄りました。震災がおきてから4年。完全に忘れかけていた。今もまだ自宅に戻れない人がいて、悲しみや苦しみを抱えている人がいることを。自分の家が、場所がどれほど安心できる場所なのかをより感じられました。

震災は今も続いていると改めて感じさせられました。この展示がもっともっと遠くの人に見てもらえたらいいなと思います。現実から目を背けないこと、自分には何ができるのか考え続ける必要性を感じました。

白黒ならではの味のある写真がたくさんあって面白かったです。

私は福島県出身で、何度もニュースで双葉町のことを見ていました。しかし、ニュースよりもこの写真の方が、震災後の双葉町、そ

こに住んでいた人たちの現状がリアルに伝わってきました。原発問題というよりも、私がこの立場になったらと考えながら写真を見て回っていました。

モノクロだとやっぱり悲しく見えてしまう。カラーだと、今はこんなに美しい場所なんだと思ってしまう。同じ写真をカラーとモノクロで展示してはいかがでしょうか。

いくつもの写真で、線量が高い地域では除染作業や環境の手入れがされていないことに気づきました。これらの地域をいち早く復旧させるために、私たちには何ができるのでしょうか。

当時の写真から最近の写真まで。あまり何も進んでないんだなというのが正直な感想です。それでも人々の写真をみて、人生を覗いたような気がして、何気なく過ごす毎日もありまえてないと感じました。

この写真展をみるために東京からきました。被災地をまだみたことのない私にとって、ここに展示されている全ての写真にそれぞれの感情をいただきました。そしてテレビや新聞では見受けられなかった数多くの光景をここで感じる事ができ、勉強になりました。

双葉町が失ったもの、残っているもの、残していきたいもの、残せるもの、様々あると思いますが。。。この町の存在をないものには今後できないだろうと思います。「人の思い」しか今後大切にしていけることしかできないのはとても悲しいことです。

写真もよかったけど、昔の友達に会えたことが一番嬉しかった。もっといろんな双葉町の姿をみたかったです。

2011年から4年が過ぎた。あっという間に時がすぎ、いつの間にか今日まで生きてきた。でも双葉町写真展を通じて、過去を振り返り、向き合っていくことの大切さを感じた。昔の出来事から逃げるのではなく、真正面から受け止めて、これからの未来につなげていきたい。そう思わされた。私自身の今後の人生、そうしていきたいと思った。

・展示写真（一部紹介）



二本の木/Two Trees

「親子の木」と名付けられた有名な3本の木が、北海道の美瑛町にあります。子となる小さな木はないものの、その木を連想させるような2本の木が、双葉の海岸に隣接した駐車場にあります。2本の木を眺め、その後に広がる青々とした田んぼ道を通り抜ける海からの帰り道が、私は大好きでした。特に太陽が沈む頃、空の色が変わり遠くの山では放射状の光が見え、その瞬間がとても綺麗でした。駐車場の自然は力を取り戻し、二本の木は本来の姿でそこにいるように見えてきます。しかし、午後4時までにスクリーニング場へと戻らなければならないため、今ではもう、その美しい夕焼けを見ることはできません。この場所は悲劇と破壊の場となりましたが、この二本の木は今でも高くそびえ立っています。

There are three famous trees in Biei, Hokkaido, which stand together and are named “Parents and Child.” In the car park adjacent to the beach in Futaba there are two trees which always reminded me of the ones in Hokkaido, albeit minus the small one. I always loved the walk back from the beach past these trees and then through the lush green rice fields. It was especially nice when the sun was going down and the light was diffused by clouds which caused ever changing colours and almost parallel shafts of light over the mountains in the distance. Nature is now reclaiming the carpark and the trees appear to be in a more natural environment. It is not possible to witness the sunset anymore because everyone must be back at the screening area by 4:00pm. This area was the scene of great tragedy and destruction but the two trees are still standing tall.



太平洋/The Pacific

私はほぼ毎日、海へ行っていました。5～10分の時もあれば、何時間もそこに居ることもありました。ここが私の大好きな場所でした。多くの時間をここで過ごしましたが、思ったほど写真は撮っていませんでした。いつでも撮れると思っていたからでしょうか。防波堤は壊れてしまいましたが、今も変わらず、この景色はとても綺麗なままです。これからもここを訪れ、写真を撮り続けたいと思っています。

I used to go to the beach almost every day, Sometimes for just for five or ten minutes and other times for hours. I loved this area of Futaba. Despite spending a lot of time in this area I never really took many photos of the pacific even tough I intended to. There was always tomorrow Although the jetty is now damaged, the view of the ocean it is still very beautiful. I will continue to take photos here when I can.